ISSN 2434-3072

150th
HOKKAIDO UNIVERSITY

1920s

1970s

北海道大学150年史 編集ニュース

第 11 号　2024年7月31日

2020s

目　次

〔巻頭コラム〕
数学を志す桂田芳枝の手紙
井上高聡 …… 2
〔北大歴史ノート　第 11 話〕
札幌への道（後編）…… 4
〔北大風景グラフ XI〕
ポプラ並木 …… 5
〔資料紹介〕収蔵庫さんぽ …… 6
〔活動紹介〕展示 preview …… 7
〔お知らせ〕『北海道大学百五十年史』資料編一の刊行 …… 8

〔巻頭コラム〕

数学を志す桂田芳枝の手紙

井上　高聡
（大学文書館准教授）

2023年5月から10月にかけて、戦前に理学部数学科を卒業し、戦後は幾何学講座の教授をつとめた桂田芳枝（1911–1980年）の旧蔵品を、ご親族の廣中幸子氏からご寄贈いただきました。同年3月、北海道大学は、研究に優れ、次世代のリーダーとなることが期待される女性教員を表彰する「桂田芳枝賞」を創設しました。現在、大学文書館では、「桂田芳枝賞」創設を記念し、ご寄贈いただいた資料を中心に、桂田の足跡をたどる特別展示「数学者桂田芳枝が切り拓いた女性研究者の道」を開催しています。

ここでは、展示資料から、桂田芳枝が大学で数学を学ぶための道を探り、勇猛果敢に奮闘していた時期の手紙を紹介します。

大学で数学を学ぶことへの憧れ

……多くの先生方がポツ〳〵御旅行に行かれ、又は暑いので大抵午前中でお帰りになられるのに、功力先生のみ午後の六時迄（朝九時から）毎日御研究遊していられるお姿を、涙のこみ上げる思ひで自分の生活の中に盛って行かふと存じます。先生と殆どお話しいたした事もなく、増して直接御指導は受けた事がないのですけれど、先生の御生活は私に大きな〳〵教ひを与へていて下さる様に感じられます。

……河口先生はお立ちになられる前、私の質問を手帳に書いて行かれました。試験委員又は著者に伺って来て下さると申されまして。何と有難い事ではございませんか？

1935年8月、北海道帝国大学理学部雇（現在の非常勤職員）として数学研究室に勤務していた桂田芳枝が姉静枝に宛てた手紙からの抜粋です。「功力先生」は、この4年後に「抽象空間の研究」で帝国学士院賞を受賞する功力金二郎教授、「河口先生」は後に桂田芳枝の指導教官となる河口商次教授です。桂田は、夏休みにも研究に勤しむ功力教授の後ろ姿に感銘を受け、また、試験（おそらく「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」）についての疑問を、関係者に聞いてきてくれるという河口教授の親切に感謝をしています。研究室の仕事をしながら、講義の聴講も許された桂田は、数学研究室の雰囲気に憧れ、北大理学部で数学を学びたいという思いを一層強くしました。

数学への愛情と熱意

……この間、稲垣様とおっしゃる方が穂刈様とお話しになっていられるのを傍で聞せて頂いたのですけれど、私は悲しくなってのどがつまりさうでした。

『数学は何の為めになされるか？』

『数学研究の精神とは何を意味するか』

唯高尚な論理形式の遊戯に過ぎないのではないかと申されました。

……リアリズムの偉大な裏付けにこそ高尚な数学の精神があると思っていたのです。科学文明の礎石にこそ数学の精神があり、芸術の中にもみんなその投石になって来ていると考へていたのです。

……数学を深く御研究なすっていられる方がこうした疑に苦しんでいられ、且数学研究を否定していられた事が悲しく寂しく感じられました。

「稲垣様」はおそらく卒業生稲垣武、「穂刈様」は数学科助手の穂刈四三二（後に東京都立大学教授、城西大学学長）です。戦時体制が深まりを見せている当時、真に純粋科学である数学の意義は、多くの数学研究者を悩ませる問題でした。そうした時代にも桂田は信念を失うことなく、「数学の本領はどこにある事か」という自問で手紙のこの部分を締めています。数学への愛情と熱意、研究への志に溢れる手紙です。

大学で数学を学ぶために

桂田芳枝は、北海道余市の小学校を卒業した後、小樽高等女学校、同校補習科と進学し、さらに3年間、東京物理学校（現東京理科大学）の聴講生にもなります。好きな数学を勉強し続けるためでした。そして、最高学府である大学で数学を学びたいという思いを抱きます。

しかし、戦前の日本の教育制度は、女性が大学に進学することを想定していなかったため、正規の進学ルートは存在しませんでした。その一方で、1910年代以降の女性の高等教育機関への進学熱の高まりにより、女性の大学進学への道がわずかながら通じていきます。北海道帝国大学理学部では、欠員があった場合、高等師範学校・女子高等師範学校卒業者及びそれと同等の能力を有する者に、受験資格を与えました。

そこで桂田芳枝は、1933年、「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」（文検）を受験します。文検は、中等学校（師範学校、中学校、高等女学校）の教員の資格を得るための資格試験です。合格すると高等師範学校・女子高等師範学校卒業者と同等の能力があると認められることになります。しかし、文検は合格倍率10倍に及ぶ難関試験でした。桂田の結果は不合格でした。

桂田は、その後も毎年のように文検に挑戦し、その間、1935年4月から3年間は北大理学部数学研究室に勤務します。ここで取り上げた手紙の時期です。

北大入学、そして

桂田は、1939年の文検に合格し、大学受験の資格を得ます。入学試験にも合格して、28歳の春、1940年4月に晴れて北海道帝国大学理学部数学科に入学しました。

理学部数学科入学後、桂田芳枝は河口商次教授に師事し、幾何学を専攻します。戦中・戦後の困難な時期の研究、数学の分野では女性最初の理学博士号の取得、スイス連邦工科大学のハインツ・ホップ教授とのリーマン空間に関する共同研究、北大初の女性の教授への就任、学生運動に揺れた1970年代の大学運営の仕事などについては、実際に展示をご覧下さい。

展示をご覧になった村守隆男氏から、桂田芳枝の幾何学の講義を記録した受講ノートをご寄贈いただきました。村守氏は桂田の教え子で、幾何学講座の助手も務められました。ご寄贈の受講ノートは、新たに展示に加えています。特別展示「数学者桂田芳枝が切り拓いた女性研究者の道」の開催は、2024年9月30日までです。

1935年8月に桂田芳枝が姉静枝に宛てた手紙と同封写真（ポプラ並木にて、左が桂田芳枝）

北大歴史ノート　第１１話
札幌への道（後編）

W.S.クラークや札幌農学校第1期生たちが、船と馬で7日かけていた東京～札幌間の行程は、鉄道の発展と青函航路の開設により、1950年代には約26時間まで縮まっていた。

1958年に上野～青森間で特急「はつかり」、1961年に道内初の特急「おおぞら」の運行が開始されると、特急列車と青函連絡船を乗り継ぎ、より短時間での移動が可能となった。

便利な鉄道の旅（1960～70年代）

北海道大学生活協同組合が合格した受験生に配付した冊子『北大生の生活』(1965年版)は、「北大生になるまで」という記事で、札幌への移動に特急列車の利用を勧めている。

札幌へは長距離なら特急が最も安上りで便利です。飛行機でなどとゴージャスな考えを起さないことです。

記事では、旅程の例として、上野を特急「はつかり」で13時30分に発ち、青函連絡船、特急「おおぞら」を乗り継ぎ、翌9時25分に札幌に着く経路をあげている。

羽田～千歳間の定期航空路は1951年に開設され、1965年当時、ジェット機が両空港を1時間10分で結んでいた。ただ、特急列車と青函連絡船を乗り継ぐ場合に約2,700円のところ、飛行機では12,200円と、学生には高嶺の花であった。

鉄道では、利用距離が100km を超える分の運賃を半額とする学生割引が受けられた。『北大生の生活』(1965年版) は、4月以降に移動する場合は北大生の身分になるため、学生割引の申請は、出身の高校や予備校ではなく北大の教養部教務掛宛てに郵送するよう注意している。

『北大生の生活』(1973年版) では、国鉄の急行・特急の乗継割引制度（1966年開始）を紹介している。

細かな注意ですが、道内の特急料金は、本州の特急から乗り継ぐ場合には、従来の半額となりますので、御参考まで。

あわせて、鉄道の旅の特典も載っている。たとえば、函館から小樽経由の列車に乗ると、大沼国定公園内も通り、駒ヶ岳や羊蹄山の雄大な姿が望めるという。また、北海道ならではの駅弁として、函館のほたて飯 (250円) と身欠き鰊弁当（150円)、森のいか飯（150円)、長万部・洞爺のかに飯 (250円) を、ぜひ一度食べてみるよう勧めている。

鉄道の旅は、比較的安価に移動でき、車窓からの景色や駅弁を楽しめるものとなっていた。

主流は飛行機へ（1980年代以降）

一方、飛行機では、1967年に羽田～千歳間の便に「青少年割引運賃（スカイメイト)」が適用された。『北大生の生活』(1973年版) に記載はないが、1978年版には「いざ！エルムの学園へ」と題して、特急・急行列車の乗継割引に続き、スカイメイトの紹介がみられる。

「時は金なり」を信条としている君なら、飛行機で、札幌へということになるでしょう。……飛行機を利用したことのある方なら御存知のことと思いますが、スカイメイトがあります。

スカイメイトは、事前予約はできないものの、「22歳未満なら、空席がある時に限り、通常料金の半額で、飛行機に乗ることができます」という割引制度であった。

『北大生の生活』(1981年版) には、本州からの鉄道の乗継割引の説明はみられず、スカイメイトの説明に続けて、千歳空港～札幌間のアクセス (国鉄エアポートシャトルきっぷ800円、民間バス600円) が紹介されている。

『北大生の生活』(1998年版) では、帰省の方法としてJRの「青春18きっぷ」やフェリーを挙げつつも、「飛行機　道外生では一番主流かな」と記されており、空路の定着がうかがえる。

＊

北大生の来札手段は、東京～札幌間を例にとると、〈船と馬〉から〈鉄道と船〉へ、さらに〈飛行機〉へと遷り変わってきた。将来、北海道新幹線が札幌まで延伸されると、三たび大きく変わるかもしれない。

（廣瀬）

北大風景グラフXI
ポプラ並木

① アカシヤ街道の絵葉書（1900～1910年代）

② ポプラ並木の絵葉書（1920～1930年代）

現在のポプラ並木の道には、ポプラが植えられる以前、ニセアカシアが植えられていた。「アカシヤ街道」と呼ばれ、第一農場北部にあった北海道農事試験場へと至る道であった。アカシヤ街道は、大学の名所の一つとして、絵葉書の図柄にもなっていた（①）。

1903年、林学科の実習で育てられたポプラの苗木が、この道に初めて植えられた。さらに、1912年には、アカシヤ街道の南側の道に、ポプラの苗木が約9メートルおきに植えられた。北側にはアカシヤ街道が残り、南側にはポプラ並木が連なる光景となった。

苗木が生長した1920年代以降、ポプラ並木は北大を象徴する名所となり、絵葉書の図柄（②）や記念撮影（表紙上段）のスポットとなった。

③は、大学創基80周年（1956年）を記念して、農学部屋上からポプラ並木を撮影した写真である。樹高30メートル程度にもなる高木のポプラは、周囲の木々と比べてもはるかに高く、きわだっている。しかし、根が浅い性質のポプラは強風に弱く、1959年9月の台風ではポプラ並木のうち9本が倒れる被害を受けた。市内の小学生から北海道知事宛てにポプラ並木の復元を願う手紙が届くなど、学外からの後押しも受けて、翌1960年にはポプラの苗木が補植された。手稲山を背景として1970年代に撮影されたポプラ並木の写真（表紙中段）には、画面の中程に補植されたポプラの若木が見える。

2004年9月の台風でも、ポプラ並木は全51本のうち19本が倒れ、8本が傾く被害を受け、再び補植された。表紙下段の写真は、2023年に撮影したポプラ並木である。往時と見劣りがないほどに生長し、変わらず人々の心を惹きつけている。

（佐々木）

③ 1950年代

（創基80周年記念撮影）

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

1950年代文学部史学科の学生資料

関秀志氏（文学部史学科1959年卒業、北海道開拓記念館元学芸部長）より、2023年11月17日、1950年代の在学時の資料をご寄贈いただきました。寄贈資料には文学部史学科の受講ノート30点、ビラやプログラムといった配布物、写真（画像）などがあります。

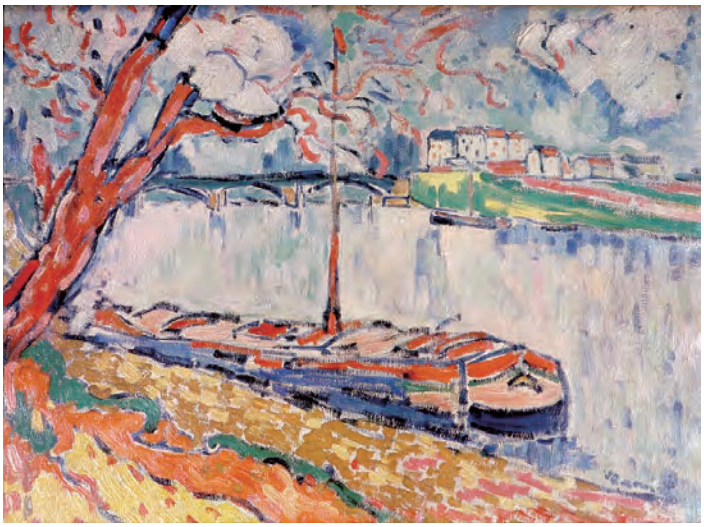
歴史学を専攻していた関氏の受講ノートには、「古代史」（阿部武彦教授）、「明治維新史　北海道史」（永井秀夫講師）、「古文書学・中世法制史演習」、（安田元久助教授）、「東洋史　漢代思想史」（板野長八教授）、「西洋史　バビロニア史」（板倉勝正助教授）、「西洋史学」（谷和雄助教授）など、幅広く諸史学の講義が記録されています。

歴史学以外にも、知里真志保教授の「アイヌ語及びアイヌ文学」、風巻景次郎教授の「国文学史概説」など、1950年代文学部の錚々たる教官たちの講義の受講ノートが見られます。

（廣瀬・佐々木）

日本史研究室前にて（1958 年秋）
関秀志氏は 2 列目左端

大滝セミナーハウスゆかりの美術品



2023年3～6月、学務部学生支援課より、同年4月末日に閉所した宿泊研修施設「北海道地区国立大学大滝セミナーハウス」に関する文書、図面、美術品などの諸資料を受け入れました。

同ハウスは、1977年に有珠郡大滝村（現在の伊達市大滝区）に設置され、北海道大学が運営を担ってきました。道内の国立大学（北海道大学、北海道教育大学、室蘭工業大学、小樽商科大学、帯広畜産大学、旭川医科大学、北見工業大学）や高等専門学校の構成員（学生・教職員）がゼミやサークルの合宿、研修などに使用してきました。

受け入れた資料の一つには、平面的な表現と鮮やかで激しい色彩を特徴とするフォービズムの画家ヴラマンク（Maurice de Vlaminck、1876－1958）の「ル・ペック近くのセーヌ川のはしけ」の複製画も含まれています。

（佐々木）

〔活動紹介〕 展示 preview

札幌キャンパスを歩く　～あの時あの場所、今昔（いまむかし）～

“オープンキャンパス2024”（8月4日・5日開催）より、大学文書館２階展示回廊にて、パネル展示「札幌キャンパスを歩く　～あの時あの場所、今昔～」を公開します。

1876年に開校した札幌農学校の校舎は、北1～2条西1～2丁目にありました。1903年、校舎敷地を拡張するため、農場敷地の一部（北8～9条西8～10丁目あたり）に校舎を新築し、キャンパスを移転しました。同じ敷地内に校舎と農場が共存する「札幌キャンパス」のはじまりです。

本展示では、札幌キャンパスを南から北へと散策するように、〈いま〉と〈むかし〉を感じられるよう、写真や図面を展示パネルに仕立て、絵画や正門の門標などと共に陳列しています。

キャンパスの南エリアの散策路は、正門を出発して、道なりに古河講堂、クラーク博士胸像の前を通り、農学部、ポプラ並木へと至るコースです。

キャンパスの北エリアの散策路は、イチョウ並木を出発して工学部に至り、教養部、獣医学部、第二農場へと北進して、さらに創成科学研究棟までの道のりをたどります。

展示回廊では、水産学部が立地する函館キャンパスのパネル展示も設けています。函館高等水産学校であった頃の歴史的建物（川畑講堂、北晨寮）や、練習船（おしょろ丸、うしお丸）などを紹介しています。　（廣瀬）

文学部（現事務局庁舎）から正門を望む（1951年頃）

工学部旧本館“白堊館”の冬景色
（長谷川脩氏作、油彩画）

〔お知らせ〕『北海道大学百五十年史』資料編一の刊行

百五十年史編纂事業の1冊目として、『北海道大学百五十年史』資料編一を、3月29日に刊行しました。

百年史編纂事業の資料集（『北大百年史』札幌農学校史料一、同二）に続き、『北海道大学百五十年史』資料編一では、1890年代後半の大学昇格運動から1945年8月の敗戦までの資料を、編年で採録しています。たとえば、大学組織の設置・改組を示すもの（触媒研究所の新設をもりこんだ概算要求書、1940年）、学生に関わるもの（女性初の北大生加藤セチの入学に関する教授会議事録、1918年）、課外活動にまつわるもの（スキー部員の冬季五輪出場を報じた大学新聞記事、1927年）などを採録しました。文書・日記・書簡・新聞など、多様な資料をとりあげるよう試みています。

題字は、3月まで編集業務にあたっていた海藤侑里子氏の揮毫です。

資料編一は、北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）にて、全文を8月以降にweb公開します。

戦後改革期から大学法人化（2004年）までを対象として現在編纂中の次刊（資料編二）は、2025年6月の刊行を予定しています。

表紙図版——ポプラ並木

- 農場実習での一息　（坂田実旧蔵、農学実科1927年卒業記念写真帖）
- 南東側からの俯瞰　1970年代　（総務課資料 No.0015-01）
- 第一農場ひまわり畑からの全景　2023年8月撮影

北海道大学150年史編集ニュース　第11号

発行日　：2024年7月31日

編集・発行：北海道大学150年史編集室

〒060-0808

札幌市北区北8条西8丁目

北海道大学大学文書館内

開室日　：平日（月～金）9:30～16:30

（祝日、年末年始12/29～1/3を除く）

TEL/FAX　：011－706－2395

E-mail　：hu150@archives.hokudai.ac.jp

URL　：https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150.html